



## ものづくりに感動を

別所 毅\*

リーマンショックに端を発した世界的経済不況や各国での財政危機のため、経済活動が停滞している。日本では高齢化の進展、労働者人口が減少していくなかでどう対応していくのか、大きな課題である。やはり、日本が得意とする技術力、ものづくりをさらに進展させるのが得策と考えられている。

ところで、みなさんは自身の成果（開発製品や要素技術など）に対して、それを使う人や活用する人に感動をもって受け入れられているとお考えでしょうか？ 私自身はものづくり（製造業）に身をおくものとして世の中に送り出している製品が感動をもって受け入れられるよう努力しているつもり（あくまでも自己評価でしかありませんが）である。電子機器では、数年前に電子手帳(PDA)を使いだしたときには、手書き入力やスケジュール管理のPCとの連動などの実用的な高機能が実現されたのに感動を覚えた。クルマではハイブリッド車の高燃費、具体的には満タン給油してから、次の給油までの走行距離が大変延びる（名古屋、東京間の往復も可）のに感動した。最近ではいわゆるスマートフォンやタブレット型PC（ネットブック、電子ブック）によって、いつでもどこでもインターネット情報や電子化された各種媒体が即座に利用できるようになった。（私はまだ手にいれていないが、息子が買ってきて「これはすごい、なんでもできる。」と感心している。）もちろん機能向上のみならず、信頼性や品質の良さでもユーザに感動してもらえらると思う。自ら「ものづくり」を経験してきたものとして、感動をあたえることや作る喜びを味わうことによって、「次は自分が、次も自分が」という「意欲」が湧いてくると思う。

「2010年版ものづくり白書」が経済産業省ホームページに掲載されており、わが国独自の価値創造型ものづくりの重要性や産学官連携の活用、キャリア教育・職業教育、さらには能力開発や人材育成に関する施策がうたわれている。「ものづくり」は「ひとづくり」とはよく言われることであり、人材という貴重な資源をどう生み出すか、どう活かしていくか今後の日本の重要な課題である。ものづくりに「意欲」をもった人材を育てるとともに流出防止の施策が必要と考える。このため、企業での教育や訓練および待遇改善も重要だが、学生時代からのものづくりに対する「意欲」、ひいては働き方についての認識を高めることが必要である。

末尾になりましたが、学会の教育事業委員会委員として抱負を述べさせていただきます。従来の先端技術、専門知識、情報の提供、技能向上などに加えて、素晴らしい先人、諸先輩方の「ものづくり」に対する取り組み姿勢などを学生や企業の若手技術者などに伝えていく場を用意できないかと考えています。そのほかの例として学会であればこそという環境を利用して、企業からは技能をもった人や匠の方、また、大学や研究機関からは日ごろあまりお話を聞けない基礎学問分野での研究者の方から講義をしていただくなどです。教育事業委員会に対する、みなさんからのご意見もいただきたくよろしく願いいたします。

---

\*当会理事・教育事業委員会副委員長、トヨタ自動車株式会社パワートレーン材料技術部主査、名古屋大学客員教授、大阪大学招へい教授